



平成 27 年 10 月 1 日 発行 第 18 号

目 次

巻頭言	
ご挨拶	
今井 眞正 ………	1
陶芸家のひとりごと	
15 年以上…	
谷口 良孝 ………	2
陶芸道中いざ凝り気	
個性を探る	
安部 邦子 ………	3
私の作品自慢	
思い出すままに	
藪 敬郎 ………	5
陶芸技術ノート	
釉薬を作ってみよう	
今井 眞正 ………	7
展覧会見聞録	
今年は“琳派”を満喫？	
今井 眞正 ………	9
活動報告	……… 11
会員便り	……… 12
編集後記	……… 13
付録 会報 投稿のしおり	……… 14

編集委員会
委員長 今井 眞正
委員 片岡 俊彦 稲垣 薫 増田 淳三

巻頭言

ご 挨 拶

会長 今井 眞正

京都・やきもの倶楽部は、平成 20 年陶芸愛好家の情報交換と友好の場として発足させて頂き、はや 8 年目を迎えることができました。これも皆様方のご協力のたまものだと感謝しております。さて今年度 2 回目会長の重責を担わせていただくことになり身の引き締まる思いであります。…体型は全然引き締まっておりませんが…。

私にとっても、皆様にとっても楽しく過ごせる会を目標に、皆様とともに運営していきたいと考えております。皆様方のご協力とさまざまなアイデアをいただければ幸いに存じます。

運営委員の皆様には、たびたび清水焼団地まで足を運んで頂き、いろんなご意見を頂戴いたしました。その中の一つ、作品展についてですが、モチベーションを保つためにも毎年開催が望ましいというのが多数の意見でしたので、毎年恒例的にさせていただく方向で皆様のご意見をまとめさせて頂きました。

また、もう一つの課題として新しい会員の勧誘が挙げられます。是非とも皆様のお知り合いの方々をお誘いいただければありがたく存じます。

それとは別に、京都・やきもの倶楽部主催の講演会や勉強会などの事業を行い、一般の愛好家の方々にとりあえずはご参加頂き、当会の魅力を知って頂き、その後入会をお願いするといった取り組みもしていくことで、新しい会員の獲得をめざしたいと考えております。

その一方では、私もそうなのですが、運営に携わる理事の皆さんも業界の中では、年齢的にも中核的な立場に置かれており、いろいろな団体の運営や、展覧会なども多くなり、時間的に余裕がなくなってきたのも事実で、皆様にご迷惑をおかけすることも多々あるかと思います。本業への従事がまず一番大切だと考えておりますので、皆様のご理解を頂きながら、さらなる運営に対するご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

陶芸家のひとりごと

15 年以上……

陶芸家 谷口 良孝

訓練校、試験場を卒業して 15 年以上の月日が流れました。振り返って見ると、陶芸という仕事を通じて私はかなり成長したと思います。この間、本当に色々な出会いがありました。私の今があるのは先輩方との出会いです。

20 歳の時、私は京都市窯業試験場で釉薬の研究をしていました。あと数ヶ月で修了式を迎え、父親の元で修行をすることが決まっていました。ある日、スーツ姿の大きな男性が 5 人、工房に来られました。当時清水焼団地青年会の役員だった今井さん、加藤さん、斎藤さん、井上さん、三谷さんです。(多分……)

「青年会に入会しないか？」学生の際は青年会に対して余り良い噂は聞かなかったので正直どうして断ろうかと考えていました。しかし、父親の薦めもあり、嫌々でしたが、会議に参加しました。会議内容は覚えておりませんが、会議は初めての経験だったのであっという間に終わりました。帰ろうとしたところ、当時会長だった加藤さんに食事に誘って頂きました。数人でお酒を呑みながら色々な事を教えていただきました。

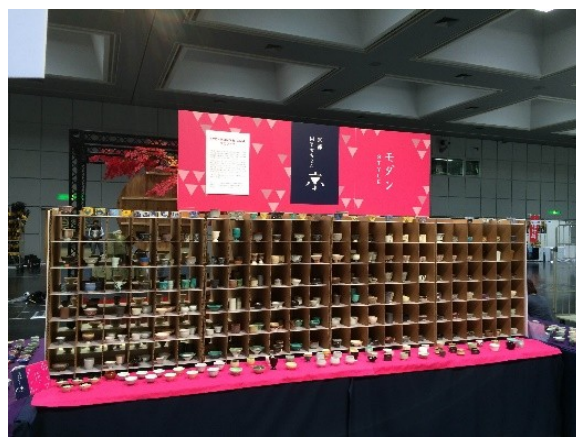
それ以来、会議の後にはみんなでお酒を呑みながら陶磁器業界の話や色々な話をさせて頂くことになりました。青年会は陶磁器業界だけでなく京都の伝統産業に携わる皆様とも交流しました。その中で私が 1 番大事にしていることは、技術は勿論なのですが、人と人とのつながりが本当に必要で大事な事だと気付きました。

京都には陶磁器業界の青年会が各地区にあり、各単位青年会が思考を凝らしながら様々なイベントを開催されていましたが、先輩達が卒業されていくと、新しい会員が入らず、会員の減少でやりたい事が出来ない現状となりました。

年に 1 回各会の会長が訓練校で集まる機会があります。その中で近況報告や、訓練校に対してのお願いや様々な意見の交換をしています。2013

年は各会の会長がみんな仲の良いメンバーだったので、「合同で何かイベントをやろう!!」ということになりました。今までにもこの様な話はあったのですが、中々実現出来ていませんでした。この機会に合同の会を作ろうと言う話になり、賛同してくれた五条地区、日吉地区、泉涌寺地区、清水焼団地の 4 つの青年会で構成した京都陶磁器青年会が 2014 年 5 月 31 日に設立総会を経て誕生しました。未熟な私でしたが、初代会長として京都府、京都市などにも設立の挨拶に行くことになりました！

初年度はまず会員の交流をと考えていましたが、京都市様から陶磁器業界を盛り上げて欲しいとの依頼がありました。京都には全国にも珍しい「日本酒で乾杯条例」と言う条例がありますが、実際にはホテル等ではグラスのお猪口が使われていますので、日本酒をグラスお猪口ではなく、陶磁器や漆、竹、石など京都の伝統工芸品で乾杯をしてもらえよう PR をしたり、マイ猪口を持ってパーティーに行ってもらえる様なプロジェクトを立ち上げました。又、「バレンタインデーにはチョコレートじゃなく猪口を送ろう!!!」と言うキャンペーンも同時に行っております。



日本酒条例サミット展示風景

勿論、陶磁器青年会では全てのことが出来ない所以京都伝統産業青年会とタッグを組み、京都の伝統産業を盛り上げて行けたらと思い、動いております。まだまだ結果は出ていませんが、チャレンジすることで本当に多くの人に出会い、支えられているんだと実感しています。また、チャレンジすることで様々な刺激を受けて感動し、自分の作品作りをして行きたいと思っています。



外務省飯倉公館にて KYO-MONO

今は、『深海の遺跡』をテーマに作品作りをしています。今年で 10 年目になり、そろそろ新しいテーマに出会い、陶芸家としての階段を 1 段登りたいのですが、中々良い表現が出来ず、もがいている毎日です。



第 37 回日本新工芸展出品 京都市教育長賞受賞作品

陶芸家にしか出来ないことは何か？と考えた時に釉薬で表現する事だと思い、研究しております。少し前は綺麗に作れなく、自然にゆがんでその歪みを利用して表現していて、それが評価してもらったこともありましたが、少し技術が身につく、まとめられる様になってくると、その一方で

面白味がない、大胆さがなくなると厳しい評価を受けています。

今後の陶芸家活動をして行くには今が勝負だと感じております。

陶芸道中いざ凝り気

個性を探る

会員 安部 邦子

ろくろって、面白そうだなあ。一度やってみたいなあ。そんな思いが実現したのが 23 年前のことです。作品展を見に行っただけのご縁に、小田原近郊のサラリーマン陶芸家の元で、私の陶芸生活が始まりました。企業の研究者でもあり、詩人でもある師匠から、土・道具・基本的な技法・歴史的な背景・窯詰めと焼成・釉薬の基本など、やきものに関わる様々なことを一から教えていただきました。そんな中で実感したことは、やきものの間口の広さと奥の深さ、尽きることのない興味。そして、心に残っているのは「安部さんはどんなやきものがやりたいのか？」という師匠の言葉。

ろくろが上手になりたい一心で練習に励んでいた当時の私は、「どんなやきものって……、とりあえずはまっすぐで均一な 30 センチ以上の筒でしよう？」「あとは綺麗な丸い壺、そして毎日使いたくなる器」心の中でそう思いながらも、師匠の言っているのはそういうことじゃないよね…と、自問自答が始まりました。そして、当時私の出した答は、「万葉集みたいなやきものがやりたいです。華麗で技巧的な新古今和歌集じゃなく、素朴なおおらかで、ちょっとユーモアもある万葉集みたいな……」若気の至りのそんな言葉も、詩人の師匠には通じたようで、「そうですか」と、笑っていました。



パンドラ (2011 年)
縦 32×横 45×高さ 32 cm

数年後、師匠のところから離れて窯を持ち、試行錯誤が始まりました。仲間との定期的な作品展や工場の教室展を重ねながら、興味を持った様々な技法を試す日々。象嵌・下絵付け・掻き落とし・自然釉・食器・花器・茶碗・香炉・人形・オブジェ・灯り・などなどなど。好奇心の向くままに次から次へと作品を作っていました。

そんなある時、「京都陶芸アマコンに出してみない？」と、友人から誘われて出品してみることにしました。これが私の公募展デビューです。こ



シーサー (2012 年)
一体: 直径 25 cm

れまで無縁と思っていた公募展でしたが、この事をきっかけに京都やきもの倶楽部へのご縁へつながる事になる、大切な出来事になりました。そして、地元の公募展にも応募してみる気持ちにもなりました。

2005 年、初めて神奈川県美術展に入選し、横浜

の海岸通りに面した神奈川県民ホールの会場に展示されることになりました。

どんな作品が入選し、どんな作品が入賞しているのだろうか。そして、大きな会場で自分の作品はどんなふうに見えるのだろうか。そんな気持ちで会場に向かいました。そこで私の見た自分の作品は？ なんてつまらないだろう。私の作品ってこんなふうに見えるのか、ダメだあ。自分の工房で見ていた作品と同じものかと疑いたくなるほど、全く違った作品のように見えたのです。それはまるで、録音した自分の声を初めて聞いた時のような気持ちでした。これが本当の自分なのか。高い吹き抜けの広々とした会場に置かれた作品は、真面目に作ってはいるけれど、面白みも、大胆さも無く、存在感の薄さばかりが気になりました。まだまだ、ここは私の居場所じゃない。そう、思い知らされた感じがしました。

そしてこの経験は、私にとってかけがいのないものとなりました。自分にとって公募展に応募することの本当の意味を見つけられたのです。力のある作品の中に一緒に並べられることが、何よりの勉強になる。今の自分の正しい姿を知ることができる。



紐練り上げ陶箱 (2013 年)
縦 17×横 17×高さ 18 cm
第 1 回 京都・やきもの倶楽部作品展 会長賞

一昨年から始まった京都・やきもの倶楽部の作品展も、私にとっては同じ意味を持っています。個性的な力のある作品の中に並べていただくことで、多くのことを感じるができます。

他の人にとって自分に無いもの

自分にとって他の人に無いもの

それを一つ一つ見つけていく中で、自分自身の個性がぼんやりと見えてくる。そんな実感があります。



OUM (2014 年)
縦 24×横 46×高さ 36 cm

このところ、私はろくろで挽いた作品をカットし、それを再構築して全く違うフォルムのものを作るという手法を試しています。

第1回のやきもの倶楽部作品展では会長賞をいただき、手探りの手法への背中を押していただいたと思っています。平凡で、真面目で、面白みも大胆さも無い私でも、切り出したパーツを組み合わせているうちに、思いもかけないフォルムが見えてきたりします。大まかなイメージだけで進めると、収まりどこを探して行き詰まる事もありますが、頭の中の発想を飛び越える事もあるような気がしています。

難しいけど面白い、難しいから興味が尽きない。「また、奇妙なものを作ってます。」と言いながら、目指しているのは、素朴でおおらかで、ちょっとユーモアのある作品。あれっ…… 20 年たっても、あんまり進歩していないみたいです。

遠方のため、役員の皆様をはじめとする会員の皆様にはお世話になるばかりの私ですが、末長くお付き合いをと思っています。どうぞよろしくお

願いいたします。



羊 (2014 年)
縦 15×横 30×高さ 35 cm
第2回 京都・やきもの倶楽部作品展 副会長賞

私の作品自慢

思い出すままに

会員 藪 敬郎

昭和 43 年 (39 才) 頃、倉吉にある上神焼 (かずわやき) の中森不入さんに茶碗作りを習いました。本当に手のかかる弟子で、手ロクロの上で、すぐに助けを求めなければ、とても茶碗になりませんでした。20 個ほど焼いて貰った後、経済的に続けられそうになく、やめる積もりでいたのですが、折角始めたのだから楽焼をして見ろと言われ、一窯分 50 個を一生懸命作りしました。当時の窯元の庭は狭くて楽窯を築く場所がなく、焼いた後はすぐ取り壊した窯でした。

この後、鳥取に転勤となり、単身赴任しました。アパートの一室でゴザ一枚が私の最初の仕事場でした。楽焼をした事が専務の耳に入り、「腕が伴っていない」とお断りしたのですが、到々口説き落されて専務のご自宅に窯を築かされました。

煉瓦を積んだだけでも焼けると言う生兵法振りでした。出来た窯は凸凹だらけの、まさに軍艦の檣楼のような煙突のあるおかしい窯でした。それでも、一度焼いたら専務も病み付きとなり、一緒に焼いたものです。しかし、他人の窯は不自由でもあり、自分の窯が欲しかったものです。この窯は5年程前に90才を越された奥様から「思い出のある窯でしたが、取りこわしました」と丁寧なお断りの手紙がある迄、立っていた様です。

中森さんの義兄で師匠でもある法勝寺焼きの安藤嘉章さんに引き合わされたのは、始めて間もない頃でした。手を取って教えて頂く事はあまりありませんでしたが、お伺いするとすぐお茶になり、話になりで、その話の中や作品を拝見する事で、とても勉強になったと思います。写真1はその頃の作品です。始めて倉吉の市展に出品しましたが、落選となりました。



写真1. 師匠から高台をホメられ、倉吉市展に出品、落選 自分では好きな作品

鳥取に2年いて、松江に転勤、庭付きの家を借りてくれましたので、早速庭に窯を築きました。夜、窯を焚くと、話が伝わって、同好の士が集まって来ました。

木村重右衛門さんと言う楽焼の大御所（私がつけた尊称）の知遇を得、「長次郎」と「のんこう」（编者注）の茶碗を拝見させて頂き、又、田部知事のご自宅の窯場や工房なども案内して下さいました。

（注） のんこう

楽家3代道入（どうにゅう）のことである。楽家の釉薬の技法を完成させたとまで言われ、唯一、吉左衛門を名乗らず、吉兵衛と名乗った。

紅雪会と言う、男ばかりで月釜を架けるお茶の会にも入れて頂きました。写真2は、1年あまりの間、紅雪会の月釜で濃茶を練って頂いた頃の作品です。



写真2. 松江時代、紅雪庵の月釜で一年位濃茶に使って頂いた作品
大きさ 13 cm×12.5 cm×高さ 8.5 cm

このような時代を経て今日まで作陶を続けてまいりました。その間、思い出に残る作品をいくつか並べてみることに致します。

写真3は、アマコン大賞の頃の作品展に入選したものです。赤楽なのですが、釉薬が白く見えています。今はこれが出なくて困っています。



写真3. アマコン大賞に入選

写真4は、退職後、平成9年9月（68才）に倉吉で初個展を開き、その時の案内状に使ったものです。この頃の黒は、島根県の山中鹿之助で有名な月山の近く、広瀬町で掘り出した石を使っています。



写真 4. 平成 9 年 9 月、倉吉での初個展



写真 6. 平成 26 年の作品

写真 5 は、平成 23 年（82 才）に開いた 3 回目の個展の案内状に使ったもので、この作品はヤマニの流下辰砂を掛けたものです。



写真 5. 平成 23 年、3 回目の個展「一入」の写し

写真 6 は、平成 26 年、貴船石を全面に掛け、長石釉でフチ取りし、更に貴船石を掛け、流下辰砂を一部掛けたものです。

10 年ほど前から愛石家の田中照人さん（故人）から貴船石を頂いて使っています。赤楽の土と白の荒土も地元の土ですが、3 年ほど前から在庫もなくなり、今は楽土に黄土を塗っています。

窯はドラム缶を 54 cm 程に切り、中に煉瓦を入れ、下から 2 インチのガスバーナーで焼いています。黒には良いですが、作り替えたせいか、赤楽には炎の遊びが少ないのか、透明になりすぎ、要改良の様です。

陶芸技術ノート

釉薬を作ってみよう

陶藝家 今井 真正

会員の皆様にとって陶芸の釉薬は、おそらくできたものを買ってきて使われるのが普通だと思います。釉薬とひとことで言っても、無限の種類があり、伝統的なものから産業技術研究所等で研究されているゼーゲル計算式にのっとった最新のものまでいろいろなものがあります。京都の産業技術研究所では、過去の釉薬の成分分析から名品の再現に向けた取り組みや、全く新しい抗菌素材の開発や、低火度での発色などいろいろな切り口で実験が積み重ねられています。また機会があれば、見学等させて頂きたいと思いますが、今回はご自身でできる単純な釉薬の調合についてお話したいと思います。

私自身も、自然の灰をベースにしたものを何種類か使っておりますが、今回は灰をベースにしたものの作り方を紹介いたします。



今井眞正 作 「亀」
土灰 50 % : 平津長石 50 %

灰については、まず材料になる木を一斗缶などで焼成することで簡単に作ることができます。また、ご近所に備長炭などでウナギを焼いているお店などあれば、お店にとっては廃棄物ですので、簡単に頂けるとおもいます。備長炭の灰は黄瀬戸の原料としては、上質なものです。ただいつまでもウナギのタレのにおいがしますので、それをよしとするか臭いとするかは、それぞれの方々のスタンスかと思ひます。補足的に申し上げますと、藁や草などは、完全に焼いてしまわず、黒く炭になった状態で使う方がよい場合もあります。この場合は蓋などをして蒸し焼きにすれば、炭の状態のままキープできます。一般的に櫨の木や榎の木、松の木などの使われることが多いですが、いろいろな木の灰がまざったものを通常土灰といひます。従って土灰はすごく幅の広いものです。藁の灰は白萩釉の原料で乳濁する特徴があります。

これら、手に入れられた灰には“あく”が多く含まれていひますので、まず灰を大きなバケツに入れ、水をいっぱいまで張ります。一晩置いておくと灰が沈殿していひますので、バケツを傾けて上水を捨ててしまひます。灰が流れないように注意してください。この時のあく（灰汁）は灰によっても違ひますが、手でさわるとすぐに手が荒れてしまひますので、なるべくさわらないように流してください。灰汁を流したらまた新しい水をいっぱいまで張ってかきまぜてまた一晩寝かせます。同じ作業を、灰汁を触ってぬるぬるしなくなるまで繰り返してください。私のところでは、約ひと月同じ作業を繰り返します。

出来上がった灰には多かれ少なかれ、鉄分が混

入していひます。このまま使うと鉄粉で釉薬にゴマが出たりしまひますので、棒磁石などでしっかりかきまぜると鉄粉が付着しまひます。これを取り除くと、ゴマが出なくなるか、少なくなります。鉄分を完全に取り除くには、強い酸などで、鉄分を溶かしてしまひ方法はありますが、危険ですので、今回はあまりおすすめしまひません。

出来上がったものをかけて焼くだけで、釉薬になります。しかし、この状態ですと熔けたと思ひたら、すぐ流れだしまひます。ちょうど良いところで温度が調整できればいいのですが、窯を開けてみると水飴のように流れて窯が台無しになってしまひことがありますので注意してください。そこで流れないために、長石とまぜます。基本的にまずは、1:1で混ぜてみてください。私は、ポットミルという武器を持っておりますので、これに原料を入れてスイッチを入れると、勝手にすってくれますが、普通は持っておられないと思ひますので、乳鉢などですり合わせてください。混ぜる度合いによっても釉薬の質が変わりますが、一番簡単なものは、そのまま原料をバケツなどに入れて棒でしっかり混ぜ合わせて 60 メッシュ程度のふるいに通せば釉薬のでき上がりです。



今井眞正 作 「河童」
蜜柑の木の灰 80 % : 福島長石 20 %

これを焼いて熔けてないようなら長石を減らし、熔けすぎているようなら長石を足してみてください。もちろん焼成温度によるのですが、ご自身でいろいろ試してみてください。また、素地によっても結果が随分違ってきます。いろいろな土でチャレンジしてみてください。

長石には福島長石や、平津長石など性格の違うものがありますので、それぞれ試してみれば、バリエーションは広がります。また、これをベースにして黄土や弁柄等を入れると、まぜる量によって、青磁→伊羅保→飴釉→天目釉等と言った変化になります。鉄分を他の金属酸化物と変えると、いろいろな色のバリエーションができます。しかしながら、そう簡単にはいかないのが常です。安定したものができるまでには、相当のテストを繰り返す必要がありますが、うまく当たればびっくりするような良い釉薬ができるかもしれません。何よりも自作ということが、気持ち良いと思いますので、ぜひチャレンジしてみてください。

展覧会見聞録

今年は“琳派”を満喫？

陶藝家 今井 眞正

もうすでにご存知の方も多いと思いますが、今年は琳派 400 年ということをキーワードに、さまざまな講演会や展覧会などが行われています。私自身も昨年からいろいろな企画で、琳派について考えさせられ、またそれを意識した制作もして参りました。

さて、琳派とは一体何なのでしょう？大変わかりにくい流派で、狩野派などのように徒弟制度の中で発展を遂げたものではありません。もともとの始まりとされる本阿弥光悦と俵屋宗達の時代から 100 年後に琳派の名前の所以である尾形光琳がそのスタイルを継承し、琳派の礎を作ったとされています。もともと光琳は京都有数の呉服店に生まれ、公家や武家の着物を創っていたそうです。

この仕事が今でいうなら、新進気鋭のファッションデザイナーと言った立場になります。当時の呉服屋はやはりそうとう裕福で余裕だったのでしょう。光琳は圧倒的余裕で光悦や宗達の新しい絵画や工芸に傾倒し、参考にしながら燕子花図屏風が生まれます。また抜群のデザインセンスを着物、帯はもちろん蒔絵、陶器などあらゆるジャンルでその力を発揮しました。ご存知陶芸家の弟、尾形乾山ともコラボし、光琳が乾山の陶器に絵付けをすることも多く、その装飾性の高いきらびやかなデザインはその後も京焼のデザインのもととされ、やきものの世界でも大変大きな影響を与えました。



本阿弥光悦(1558-1637) 赤楽茶碗 銘熟柿



俵屋宗達(生年不詳 1570年代?) 風神雷神図屏風



尾形光琳(1658-1716) 燕子花図屏風

その後酒井抱一などによって、江戸にも伝搬し大きな美術のムーヴメントとなりました。また時代を経て、京都で生まれた神坂雪佳は日本画家としてのみならず暮らしの中のデザインとして、陶器、染織、漆芸などに積極的に琳派のデザインを取り入れていきます。



酒井抱一(1716-1829) 青楓朱楓図屏風



神坂雪佳(1866-1942) 四季草花図屏風

そもそも 400 年というのは、琳派の祖のひとりといわれている光悦が 1615 年に徳川家康から鷹峯の地を拝領し、多くの工芸家、芸術家とともに「光悦村」を拓いたことから数えて 400 年ということで、京都では多角的に琳派を考察し、次代につなげて行こうという志のもと、400 年祭と言った企画が組まれました。

そんな成り立ちから琳派の特徴とは一体何なのかということについては、確定的な説明がつかないのが特徴ではないかと私は考えています。私も京都で生まれ、美術を志した人間として、宗達の風神雷神図屏風はカッコイイ絵の象徴で、掘り下げて研究したことがあります。大胆な構図と勢いのある自由な線は私も憧れる部分です。ご多分

にもれず、以前、私も風神と雷神は作らせてもらいました。

また、絵付けをする場合、尾形乾山の図案を参考にしたり、神坂雪花の繊細なデザインも参考にすることがあります。あらためて見てみると、京都のデザインの根底に流れているものは、琳派の流れをくむものが非常に多いと感ずることができるでしょう。



尾形乾山(1663-1743) 白泥染付金彩芒文蓋物



神坂雪佳(1866-1942) 手摺木版

京都では、これから秋にかけてさらに琳派を前面に出した企画が目白押しです。京都国立博物館での「琳派 京を彩る」と題した展覧会は、かつてなかった規模の琳派の集大成だと聞いており、私も楽しみにしている展覧会です。その他も京都近代美術館や、京都市美術館でもそれぞれ切り口を変えて展覧会をされる予定と聞いております。また、11月1～3日の「大交流祝典」の開催等が予定されるなど、琳派一色の美術シーンになると思います。私は今年の春京都文化博物館で行われ

た「京に生きる琳派の美」展が好評だったということで、来年の3月には、日本橋高島屋で再度開催される予定で、これには出品させていただく予定です。

せっかくの機会ですので、琳派を肌で感じ、ご自身の生活の中にいかされてはいかがでしょうか。きっとより豊かな生活になると思います。

活動報告

作品展実行委員会報告

現在、「第3回京都・やきもの倶楽部作品展」の準備が実行委員会において進められています。実行委員会は運営委員会と同じで、委員長(会長)、副委員長(副会長)、委員8名(会員)で構成されています。今回は、この欄を借りて実行委員会での具体的な準備作業を紹介します。作品展は既に過去2回開催されており、作業の手順がおおよそ決まってきているので、すべての作業を最初に洗い出し、以下のようなスケジュール表をつくることに致しました。

きよみず苑 会場設営のための準備 (6/26～7/19)

展示台・受付機の調達手段と費用の調査
郷まつり実行委員会との連携策の提案

開催通知の送付 (7/2～7/16)

出展者募集案内
案内状の送付
出展者の集計と未回答者への電話連絡

DM作成 (7/19～8/29)

デザイン・校正・印刷

作品展案内状の送付 (9/1～9/20)

作品展のご案内
出品要領・出品票
出品料の振込票
懇親会場の予約
賛助出品者への参加依頼(期日厳守)
案内状・DM等の発送
出展者の集計と未回答者への電話連絡

出品票結果の集計

作品展当日のための準備 (9/24～10/10)

出品者名簿
出品者リスト
出品料の入金確認(～9/24)
出品目録(入賞作品を記載 10/16)
作品キャプション(用紙の購入・印刷)
図録作品について一言のまとめ
作品番号札(写真撮影用)
表彰状(用紙の購入)
展示台・受付机・カンバン・トロフィー・副賞
用意購入しておく備品(リストあり)
各賞表示札、撮影禁止貼り紙、
受付スタッフ名札、受付当番注意事項
入賞作品審査員、作品講評担当者の選定
京都新聞社等への掲載依頼
ヤマト宅急便との連絡(搬入・搬出)

作品展開催 (10/15～10/19)

搬入・搬出時の作業(手順書あり)
懇親会配布用名簿・名札の作成
懇親会場への案内と受付(参加費・名簿・名札)
懇親会の写真撮影

図録作成 (10/16～12/1)

作品の写真撮影
撮影補佐
編集・印刷・製本
図録送付・作品展アンケート送付

各作業項目について、実行委員の中からそれぞれ責任者を決め、実行に移していきます。それと同時に月1回のペースで実行委員会が開かれ、その合間の連絡にはEメールでのやり取りが行われます。本会報がお手元に届く頃にはスケジュール表で半分以上の計画が達成されていることと思います。

京都・やきもの倶楽部の事業としてこの作品展一つを取ってもスタートからゴールまでおよそ半年の期間を必要としています。倶楽部としては、これ以外に年4回の「倶楽部だより」の発行、年2回の「会報」の発行、「総会・懇親会」の開催といった行事がありますが、すべてをなんとか計画的に実施できるようになってきました。これも、運営委員会の皆様が、倶楽部のためにご自分の時間をやりくりしてこられた結果だと思っています。

陶芸好きの会員の皆様、是非とも運営委員会を
応援いただくとともに、ご自身の運営委員会への
積極的なご参加をお待ちしております。

(文責：作品展実行委員会幹事 片岡)

会員便り

個展・グループ展・公募展

(平成 27 年 4 月 ～ 平成 27 年 9 月)

京都・やきもの倶楽部に所属されている方々の
展覧会で、機関誌「倶楽部だより」に掲載された
ものをまとめています。会員各位の活動状況をお
知らせするために設けました。掲載希望の方は、
どのような規模の展覧会でも結構ですので、ふる
ってお申し込み下さい。用紙は、「倶楽部だより」
に添付されている展覧会情報掲載申込書をご利用
下さい。

平成 27 年

■ 4 月 6 日 ～ 4 月 17 日

新世展

銀座ギャラリー アートスペース VISION

(東京都 中央区)

今井 真正

■ 4 月 25 日 ～ 5 月 17 日

琳派 400 年記念

現代作家 200 人による日本画・工芸展

「京に生きる琳派の美」

京都文化博物館 (京都市)

市川 博一、今井 真正、加藤 丈尋、

谷口 正典、谷口 良孝、森田 隆司

■ 5 月 13 日 ～ 5 月 19 日

“土の彩” 今井真正展 大阪展

高島屋大阪店 6 階 美術画廊 (大阪市)

今井 真正

■ 5 月 14 日 ～ 5 月 19 日

宮崎まさのり 切り絵象嵌陶展

ギャラリー 象鯨 (京都市)

宮崎 正制

■ 5 月 28 日 ～ 6 月 3 日

第 11 回 筍豊会展

福屋八丁堀本店 7 階 美術画廊 (広島市)

今井 真正、市野 雅彦、滝川 幸志

松谷 文生、水上 勝夫

■ 6 月 6 日 ～

第 5 届中・日・韩名家艺术邀请展

上海艺术礼品博物馆 (中国 上海市)

今井 真正

■ 6 月 11 日 ～ 6 月 14 日

第 10 回 吉田貢 作陶展 (穴窯)

曼珠苑ギャラリー (東京都 調布市)

吉田 貢

■ 6 月 20 日

竹鶴政孝・リタ像除幕式

竹原市設置会場周辺 (広島県 竹原市)

今井 真正

■ 6 月 30 日 ～ 7 月 5 日

そうび展 I 期

木津川市立中央図書館 2F 展示ホール

(京都府 木津川市)

稲垣 薫

■ 7 月 17 日 ～ 7 月 31 日

荒川 明 作陶 35 周年展

浜名湖館山寺美術博物館 1F

カフェギャラリー (浜松市)

荒川 明

■ 8 月 1 日 ～ 8 月 2 日

塊 (つちくれ) ・作陶展

id Gallery (京都市)

片岡 俊彦

■ 7 月 18 日 ～ 8 月 30 日

神戸ビエンナーレ 2015

現代陶芸コンペティション

兵庫陶芸美術館 (兵庫県 篠山市)

和田 真理子 (入選)

■ 8 月 24 日 ～ 9 月 5 日

開廊記念特別展

アトリエ ヒロ (大阪市)

今井 真正、市野 雅彦

■ 9月30日 ～ 10月6日

市野雅彦 陶展

日本橋三越本店本館 6F 特選画廊
(東京都 中央区)

市野 雅彦

凡例

■ 開催期間

展覧会名

展覧会場 (開催地)

出品者名 (入選、入賞)

編集後記

先日のテレビ番組に作家で政治家でもある石原慎太郎さんが出演し、司会者からこれからの日本に必要なことは？と聞かれ、「それは、日本人のそれぞれが感性を高めることですよ」と答えていました。今の世の中では、多くの人達が情報の中に埋もれ、時とともに変わるフワッとした民意があたかも唯一正しいかのような錯覚に陥ってしまう状況を指しての発言でした。当倶楽部の「会報 15号」の中で、私は“感性”という言葉について次のように書いたことがあります。芸術（陶芸）と科学（研究）には共通点があり、どちらもそれに携わる人の感性が大事であって、その道を歩んでゆくためには、感じるままに行動すべきです。この考えがあって、政治、ひいては経済においても、感性が大事だとする石原さんの発言に共感を覚えたのです。

陶芸の世界でも、展覧会でのギャラリートークで「この作品は技術的にはすごいんだけど…」とか、「アマチュアなのだからもっと…」とかの講評をよく聞きます。これは、すべて感性不足だと言われているのだと思っています。本号で執筆をお願いした谷口良孝さんが原稿の最後を書いておられることも感性と関係があるのかも知れません。自分で生涯満足できる作品などできるはずはないですね。いつもいつも感性をとぎすまし、自己主張を続けることが「作品」なのかも知れません。

この会報が、皆様方の陶芸を続ける原動力としてお役に立つことを願っております。

(編集委員 片岡俊彦)

[京都・やきもの倶楽部 ホームページトップに戻る](#)